

**国際関係学部 英語教育特別講演**

# 外国語学習の科学

—SLA 理論からみた効果的な英語教育とは—

白井 恭弘

(ピッツバーグ大学教授)

今日は「外国語学習の科学—SLA 理論からみた効果的な英語教育とは」ということでお話したいと思います。まず最初に自分が一番最初に英語教員になったときのことをちょっと話しますと、僕は普通に日本の大学を出て、英語教員になったわけですね。最初に教えたのは、埼玉県の公立高校です。その時に自分が教えたやり方というのは、自分が教わったやり方と全く同じだったんです。それはなぜかという、結局自分で教えるとなると、自分が経験したものでしか教えられないことに気がついたんですね。それで、文法訳読方式みたいなものを使って教えていたわけです。でも、これだけではつまらないなあと思ひまして、教員になって2年目に上智大学のコミュニティーカレッジに行った。そこで吉田研作さんという有名な先生の英語教授法の授業をとったんです。高校での授業が終わって夜一時間かけて行って、その授業を受けていました。これがものすごく面白かったんです。そこが実は私の第二言語習得研究との出会いなんです。



## 略歴

上智大学外国語学部英語学科卒業。高校教諭を経て、カリフォルニア大学ロサンゼルス校にてM. A.、Ph. D. 取得。

コーネル大学准教授などを経て2006年からピッツバーグ大学言語学科教授。Studies in Second Language Acquisitionなどの学術誌の編集委員、言語科学会 (JSL) 会長をつとめる。

著書に「外国語学習に成功する人、しない人」(岩波科学ライブラリー)、「外国語学習の科学」(岩波新書)、「しゃべる英文法」(コスモピア)などがある。

それで、その授業で教わったことをどんどん自分の教えている授業の中で活かしていくわけです。そのプロセスがまず非常に面白い。で、今度はですね、最初は1、2、3年生と一まわり教えたんですけども、もう一まわり目の時、今度は個々の授業だけではなくて、プログラム作成、つまりその学年の英語教育のプログラムを作れるような状況にいたので、その時に、じゃあもう少し本格的にやってみようということで、Second Language Acquisition (SLA=第二言語習得)の「インプット仮説」というものを利用して教えてみたんです。そうしたら、偏差値が10上がったんですね、一年で。これは、自分でもちょっとびっくりしたんですけども。高校の教員は7年間やったんですが、その後も、アメリカでは日本語を教え、日本では英語を教えるということで、大体20年以上、外国語教育にかかわってきました。外国語教育をやる中で、ただ単に教えるのではなくて、SLA理論をいかに外国語教育に応用するか、また外国語教育を実際にやりながら、第二言語習得の理論的な問題を考えていく、そういったようなことをずっとやってきたので、僕自身はSLAは机上の空論だとは思っていないんです。SLA理論というのは本当に言語教育に応用可能な理論だという確信をもってっております。

## 第二言語習得の研究

第二言語習得は非常に身近な現象を扱う研究分野ですが、その知見はあまり一般社会、特に日本では知られていないということに気がつきまして、もう少し一般の人に知ってほしいと思ったわけです。外国語を教えている人は、ものすごくたくさんいるわけですね。それから、外国語を学習している人もものすごくたくさんいる。そういう人たちが第二言語習得という分野の研究成果を何も知らずにやっているのはまったくエネルギーの無駄であろう、というふうに考えまして、「外国語学習に成功する人、しない人」という本を2004年に出しました。これが結構売れたので、2008年に「外国語学習の科学」というの

を岩波新書から出して、これは今、8刷りくらいですかね、結構売れています。それから「しゃべる英文法」っていうのは、英語学習本なんですけれども、これも、第二言語習得理論を応用して作った自主学習用教材です。この本で強調しているのは、「大量のインプットと少量のアウトプット」ということですが、これはどちらがかけてもだめなんですね。インプットだけでもだめだし、アウトプットだけでもだめ。大量のインプットと少しのアウトプット、これを僕は常に話をしているのですけれども、今日他のことを全部忘れてもいいですから、これだけは覚えて帰っていただければと思います。なぜこれが大事なのかは、あとで説明します。

それから、この「日本語を教えるための第二言語習得論入門」という本は監修ですけれども、最近出た本ですね。これは僕が監修しているだけです。

第二言語習得 (SLA) 研究とは何か。まず、第二言語習得という学問分野、これは非常に若い学問分野ですので、これが何をやっているのかということについて、ちょっと話をしたいと思います。

その歴史は40年とか50年くらいですが、これまでに膨大な量の研究がなされている。どんなことをやっているか、ということ、一言でまとめるのは難しいんですが、僕なりに一言でまとめてみたのが、次のようなことですね。

「第一言語（母語）習得の均一性」（ほとんどが成功する）

「第二言語（外国語）習得の多様性」（ほとんどが失敗する）

つまり、母語習得、第一言語習得というのはほとんどの人が成功する。つまりそれだけ均一性があるわけです。ところが第二言語（外国語）習得の場合は、非常に大きな多様性があるわけですね。ネイティブに近い領域まで行くか、ということ考えると、ほとんどの場合、失敗に終わるわけです。これはいったいなぜなのか。これを明らかにしようとしているのが、第二言語習得という研究分野であるといっても過言ではありません。

また、もうちょっと異なった観点から言いますと、外国語学習というのは、われわれ人間という種が母語以外の言語を習得するという現象ですね。その現

象に関しては共通点があるわけですから、そういった学習過程における普遍性があるだろうと、つまりわれわれが外国語を学習する時におこる普遍的なメカニズムみたいなものが何かあるはずだ、と。それを明らかにしようとするのが、ひとつの研究のポイントです。普遍性を明らかにするのです。それからもうひとつの側面は、外国語学習における個性、多様性です。共通点はあるにしても、さまざまな環境において、さまざまなタイプの間人が、さまざまなタイプの外国語を習得している。いったいどういう時にどういうことが起こるんだろうか、という個性を明らかにする。これがもうひとつのポイントですね。

その中で特に重要視されているのが、どんな学習者が外国語習得に成功するか。これについてはまた後でもう少し詳しく説明しますが、個人差研究というものですね。学習者は、100人いれば100人全員違いますから、その人たちが、どういった点が似ていて、どういった点が異なっているか、そういったものを明らかにする個人差研究があるわけです。以上のようなことを、SLA研究というものは研究対象としてきたわけです。

第二言語習得における個人差ということで、今ちょっと話にふれました外国語学習における個人差、これについて早速入っていきたいと思います。まず、どういう人が外国語学習に成功しているのか、そこから学ぶということは実利的にもかなり重要なことではないかと思うのです。今まで約50年程度の第二言語習得の研究によって、わかっていることを簡単にまとめてみると、次のようなことになると思います。

まず若いこと。学習開始年齢が若い方が学習に成功する可能性が高い。これはいわゆる臨界期仮説、今日は詳しく説明する時間はありませんけれども、いわゆる臨界期仮説、つまり12、13歳を過ぎると外国語をネイティブのように習得することは不可能であるという仮説ですが、年齢が若い学習者の方がいいということがいえるだろうと。

それから2番目は、学習動機が強いこと。つまりやる気があるということですね。これはいわゆる動機付け研究、モチベーション研究の中からわかっ

て来たことです。3番目は、学習適性、適性が高いこと。外国語学習適性というものがあるということが言われています。つまり、学習適性が高い人が成功する。

それから4番目、母語が学習する言語に似ている人のほうが、外国語学習に成功する可能性が高い。たとえば、日本人が英語を習得するよりも、オランダ人が英語を習得するほうが易しい。これは英語とオランダ語が非常に似ているからだということが言える。逆に、韓国人が日本語を習得することは、韓国人が英語を習得することよりも易しい、ということが言える。つまり、似ている言語を習得するほうが易しいわけですね。まあ、似ている言語というのはある意味で方言ですから。例えば、ポルトガル語とスペイン語という2つの言語がありますね。この2つの言語は、別の言語としてとらえられていますが、実際問題としてこの2つは非常によく似ている。ですから、ポルトガル語話者とスペイン語話者がお互いに会話すれば、話は何とか通じてしまうわけです。ですが、いわゆる政治的な理由で、この2つの言語は別の言語というふうに考えられている。ということで、方言の学習は、別の言語の学習よりも易しいですから、そういう意味で、学習する言語が似ていれば、それは習得に成功する可能性が高いということですね。

そして最後に、学習法が効果的であること。あまり説明の必要もないと思うんですが。この5つを満たしていれば、外国語学習に成功する可能性が非常に高いというふうに考えることができます。

これら5つのうちの「動機づけが高い」と、「学習法が効果的である」の2つだけが、われわれが学習者として、もしくは教師として変えることができる、と思われているものなのです。どういうことかというと、年齢は変えられないですね。それから適性というものも、研究者の間では変えられないものと考えられています。それから、自分の母語を変えることもできない。ということで、われわれが変えることができるのは、「学習者の動機」と「学習をより効果的にしていく」、この2つしか変えられないわけです。ですから、われわれが教

師として変えられるもの、この2つに重点を置いてやっていけばいい、ということですね。

次に、外国語学習適性というものがあるのかどうかという話ですが、これは実は昔から非常に重要な問題として考えられてきたんです。さて、外国語が出来る人というのは、大体学校の他の教科の成績もいいという現実がありますね。そうすると、外国語適性というものは一般的な知能と同じではないかという考え方もできます。ところが一方で、他の科目はできないのに英語だけできるとか、他の教科はできるのに英語だけできないとか、そういう子もいるわけです。

ではいったい現実はどうなのか、外国語学習特有の適性というのがあるのか、ということで、研究者たちが昔からずっと研究を進めてきているわけです。結論を先に言えば、外国語学習に特有の適性がある、ということが分かっています。外国語学習適性というのは、いわゆるIQテストで測るような一般的知能と非常に大きく重なっているわけです。ですから、外国語ができる人は他の科目も大体いいということはあるわけですね。ところが、重なっていない部分がある。その重なっていない部分があるからこそ、英語だけできるような子がいるとか、他の科目は良くできるのに、英語だけだめだとか、そういうことがある。ですから、外国語適性がある、ということに関しては、研究者の間で一応一致をみえています。

それでは、いったいどういうものが外国語学習の適性になるんだという研究なのですが、研究者は適性というものを適性テストで図られるような能力、というふうに考えています。ちょっと本末転倒なところもあるのですが、実は適性テストは膨大なデータに基づいてできているんですね。

これも40年、50年前の時代ですけれども、アメリカの国務省の関係で作られているんです。なぜ適性テストみたいなものを作る必要があったのかというと、結局国民の税金を使って外国語を省の役人に教えているわけですよ。ですから、外国語学習の適性の無い人に、例えばロシアに行ってロシア語が完璧

なスパイになるとかそういうミッションをやらせようとして教えても、それは税金の無駄遣いになるわけです。ですから、外国語学習の適性がある人となない人と分けてしまえと。そして、適性がある人にだけ教えるようにしよう、と考えたわけですね。それをするために、膨大な量のデータをとって、統計をかけて、出来上がったのがMLAT (Modern Language Aptitude Test) というテストで、これは現在でもかなり研究者の間で使われています。MLATの作成過程で出て来た適性の構成要素は、もともとは4つあったのですが、現在では次の3つが適性の要素だと言われています。

まずは「言語分析能力」。これは、言語規則を分析する能力です。文法的分析能力といってもいいかもしれません。それから「音声認識能力」。これはいわゆる聞いたことのない言語音声を認識して、さらにそれを頭の中で保持しておく能力。ただ単に聞くだけでなくそれらを保持していく能力、再生できなければいけません。それから最後は「記憶力」です。これはいわゆる丸暗記する力。例えば、ただ単に単語を覚える力、そういったものです。この3つが高ければ、だいたいにおいて外国語の学習に成功する確率が高いであろうと言われています。それ以外にも適性研究の結果、いろいろ分かってきたことがあります。まず、すでに先ほど言ったことですがけれども、「IQと適性には重なりが大きい、全く同じというわけではない」、つまり、言語学習特有の適性がある、ということです。

それから、「例外的成功者は、『記憶』に頼る傾向がある」ということ。例外的成功者とはここではいわゆる思春期、いわゆる臨界期といわれる12、13歳を過ぎてからネイティブに近い外国語能力を身につけた人のことです。そういった人達のケーススタディーがいくつもあって、そういう人たちを見ているとですね、どうも文法というよりも記憶に頼っている傾向がある。またこういう人たちはかなりの記憶力を持っているということが言われています。

それから3番目、「適性と学習法をマッチさせると効果がある」。これは教育現場でもわりと重要なことですので、もう少し詳しく説明しておきたいと思



います。適性研究っていうのは、ある時期非常に進んだが、その後あまり人気  
がなくなった。なぜ人気がなくなったかということ、だいたいにおいて、外国語  
教育プログラムは、まあ日本の英語教育もそうですが、いわゆる一斉授業をし  
ますね。30人なり50人なりの生徒にみんな同じように教える。こういった  
事実上の制限下で行われているので、個人の適性がわかっても、できることが  
非常に限られている。それから、もうひとつは、適性を調べてしまうとちょっ  
と差別的になるということです。例えば、「お前は適性がない」と言われたら、  
それだけでやる気を失ってしまう場合も考えられる。ということで、特にアメ  
リカで平等主義が強くなってきましたから、そういう意味で不人気になったこ  
ろがある。でもよく考えてみると、われわれは「全体」を教えているわけでは  
ない。われわれがやっているのは、個人個人の頭の中で何がおこるか、個人個  
人の頭の中で学習がおこることを究極的には目標にしているわけで、やっぱり  
個人を見なければいけないわけですよ。

適性と教え方をマッチさせるということが、どういう研究に基づいているか  
ということ、1980年頃にカナダで行われた研究ですけれども、学習者を言語分  
析能力の高いグループと、記憶力・暗記力の高いグループに分けたのですね。  
それで、それぞれ違う教え方にマッチさせてみた。言語分析能力の高いグルー  
プに、文法中心の授業と暗記中心の授業2つにわけて授業を行った。それか  
ら同じように、記憶力・暗記力の高いグループも、文法中心の授業と記憶中心  
の授業に分けて教えてみた。これをやってみたところ、これは当たり前といえ  
ば当たり前なんですけれども、自分の適性にマッチした教え方をされた学習者  
のほうが、成績が早く伸びるし、それから授業に関する好感度も高いという結  
果が出たわけですね。これは何を意味しているかということ、もちろん適性と学  
習法をマッチさせると、効果が上がるということです。

このことから言えるのは、まずひとつは、一斉授業の時にもわれわれは学習  
者の適性を考えなければならない、ということです。学習者の適性をまず知っ  
た上でどういうふうにすればいいか考える。例えば、ある学習者が音声認識能

力が低かったとします。実はけっこういるんです、音声認識能力が低い学生は。われわれが知らないだけで、たくさんいます。そういう学生に対して音声だけ使って例えば直説法で教えたら、そういう学生はどんどん落ちこぼれて行ってしまいますね。私の知り合いで日本語教育をやっている人、つまり外国人に日本語を教えている人が、そういう学習者は必ずいるっていうのですが、日本語教育っていうのは結構直説法、つまり日本語を使って日本語を教えていますから、そういう学生はどんどんどんどん落ちこぼれていくわけです。そういう学生が落ちこぼれないようにするために、何をやるかという、例えばテープもしくは最近はコンピュータでサウンドファイルを使ってやっていますけれども、そういうのを家に持って帰って聞いてきなさいと、何度も聞いて、そして文字とマッチさせる。そのような補助教材を作ってあげたりするとかですね。そのような手立てを打ってやる。何らかの形であらゆる適性のタイプの学習者が引っかかるところがある、そういう教え方をわれわれはしていかなければいけないということです。大事なのは、適性というのは、1～100までのスケールの中で、この人は50点、この人は70点とか、そういうものではなくて、この学習者はこの適性は強いけれども、この適性は弱い、そういう複眼的なものだということですね。ですからそれをわれわれはそのことを意識して教えていく必要がある、ということです。

それからあともうひとつ最近、いわゆる完全な一斉授業だけではなくて、個別指導のようなことも行われていますし、さらにコンピュータ化によって個別学習も可能になってきています。ですからひとつ考えられることは、例えば学習者向けに自学自習教材みたいなものをつくってあげることです。そして、学習者にまず一番最初に適性テストのようなものをして、あなたの適性はこういうことですよ、とそれをまず診断してあげるわけです。その診断に基づいたエクササイズをその学生に合わせて出していく。例えば記憶力が高い学生には暗記中心のエクササイズが出てくるという形で。そういった自分が得意なものを中心にした学習ができるようにすれば、学習者も力がすぐに伸びるだろ

うし、学習経験もポジティブになるだろう。自分に合わないものをやらされると、あまりいい経験にはなりませんから。ということで、適性というのは学習者と学習方法をマッチさせるという観点から考えていかねばならないということ、われわれは教師として覚えておく必要があると思います。このあたりさらに詳しいことはさきほど紹介した「日本語を教えるための第二言語習得論入門」に書いてありますので、ご覧下さい。それから適性について最後に、ちょっと大事なことなのですが、岩波の本について、いろんな人がブログなどで感想を書いているわけですね。それでよく見かけるのは、「自分は適性がないということがわかった」といった感想なんです。そして適性がないということが分かったので、自分は勉強しても無駄だと言って、勉強しないことの正当化に使っている人が結構いるのです。けれども、適性というのは「あるかないか」ではなくて、「高いか低いか中くらいか」ぐらいで考えたほうがいいんですね。適性がものすごく高い人もいれば、中くらいの人もあるわけですね。それから、もうひとつ、実はさっき言った MLAT という適性テストは、結局一学期だとか二学期の間に、どこまで伸びるかという学習のスピードを予測するデータに基づいた適性テストなんです。それがさっき言った、アメリカの国務省、日本の外務省にあたる国務省の語学研修所でのデータに基づいて作ったテストですから、そのテストで適性を判断しているわけですね。そういう意味では短期的な成功を予測する、そういうテストなわけですね。ところがですね、実際には短期的には駄目でも長期的にはものすごくできるようになる人がいるんです。また別の研究なんですけれども、外国語がネイティブに近くなるくらいまで出来るようになった人たちのケーススタディーをしてみた研究があって、そこでわかったことは、ものすごくネイティブに近くなった人たちが必ずしも最初のうち学習のスピードが速かったわけではない、むしろ最初のうちは遅かったというような人もずいぶんいることが分かったんですね。ですから、そういう意味で、この適性テストというものが、習得の「ある側面」をとらえているに過ぎないという面もあります。

実は、外国語学習というのは、条件さえ揃えば誰でも可能なわけです。こういうことは、日本のようなモノリンガル社会では忘れ去られていることなんです。例えば英語がペラペラだとか、スペイン語がペラペラだとか、中国語がペラペラだとかそれだけですごいことのように思われますよね。けれども、日本のようなモノリンガル社会というのは世界では少数ですね、世界でみればバイリンガルなんていうのは当たり前なわけですね。例えば文化人類学の研究によれば、ある未開といわれている社会で、必ず全てのひとが第2言語、第3言語をしゃべらなくてはいけないという、そういう社会もあります。なぜかというとその社会のしきたりで、同じ言語をしゃべる人と結婚してはいけないという、決まりがあるんです。そういうことになったら誰でも第2言語を習得せざるを得ませんよね、結婚したいと思えば。ということで、これは極端なケースですけれども、外国語習得というのは条件さえ揃えば、誰でも可能なんです。ですからわれわれ教師がやらなければならないことは、外国語習得ができるような条件を整えてあげることです。それをやってないから出来るようにならないわけですね。そのことをわれわれは忘れてはいけないと思います。

じゃあその条件が整っていないのはいったい何故なのか、ということになるわけですね。それは教え方が悪いということになる。これについてはまたあとでお話します。

## 動機づけ

さて、動機づけ研究というのは50年、60年という歴史がありまして、かなり行われています。よく日本人は英語が出来ないと言われてますけれども、なぜ日本人は英語が出来ないかの理由はもちろん一つだけではない。それで、そのうちの一つにですね、「必要がないから」、つまり動機づけが低いというのがあります。別に英語ができなくても、普通に暮らして行けるわけですね。ですから、必要がないから、つまり動機づけが低いから英語ができない。ああ、な

るほどと、これはかなりあたっています。でも最近では経済がグローバル化してですね、動機付けは高まっているような側面も見られます。最近のニュースではですね、ユニクロとか楽天が会社の公用語に英語を採用したとかですね、そういうふうになると必要に迫られますよね。そうなれば、誰でも英語が習得できるようになるかもしれない。

研究の結果、動機付けが非常に重要なことは分かっているんですけども、この動機付け研究でよく言われる概念が「統合的動機付け」と、「道具的動機付け」です。統合的動機付け (integrative motivation) は、自分が学習している言語をしゃべる人たち、例えば英語だったらアメリカ人とかイギリス人とかオーストラリア人だとかがネイティブスピーカーですけども、そういう人たちと仲良くなりたいだとか、そういう人たちの文化に触れたいだとかですね、そういう人たちの文化に好意をもっている、興味があるそういったようなものですね。それに対して、道具的動機付け (instrumental motivation) ですけども、これは外国語、特に英語とかを単なる「道具」として、インストゥルメントとして何か別のことをアチーブ (達成) するための道具としてとらえているというものです。ですから、入試にあるから勉強するとか、TOEIC 手当が月に 3000 円付くから TOEIC の点数を上げなければいけないとかですね、そういったようなものですね。動機付け研究の歴史の中で、統合的動機付けの方が大事であろうと最初のころは言われていたのですけれども、研究が進むにしたがって、別に統合的動機付けがなくても道具的動機付けが非常に強ければ、それは習得につながるということが分かってきました。

このような研究は、1960 年代からずっと続いていますが、最近、「国際的興味」という新しい動機づけのタイプに関する注目が高まっています。これは何かというと、外国のこと全般に興味があると、英語学習に関して興味が高まる、というようなことです。これは日本の関西大学の八島智子さんという人が提案した考え方で、最近世界的にも非常に注目をあびている概念で、international posture つまり、国際的態度や国際的姿勢ですね、そういった

概念です。

英語というのはもうすでに国際語、世界語になっている。ということで、必ずしも英語のネイティブスピーカーとか、そんなことは関係なく、何か外国の人とやり取りするときに、英語はもう必要不可欠になっている、という現実があるんです。ですから、そういった現実をふまえて、最近の英語学習者は別にアメリカとかイギリスとかにぜんぜん興味がなくても、英語には興味がある。ただその場合は、内向き、つまり日本さえ見ていけばいいというわけではなくて、外国のことに興味があるという態度を持っていないと、いわゆる外国語学習に積極的な態度に結びつかないという、そういう研究を八島さんはやってるわけですね。ということで、この最後のポイントは実は結構大事なことで、アメリカだとかイギリスだとかオーストラリアだとか、そういったものばかりやってるのじゃなくて、英語が使えないと世界の人々とコミュニケーションがとれないよ、というような感覚をいかに学習者に認識させていくか、ということが非常に重要になってくるのではないのかなという感じがします。

以上がいわゆる態度的な動機とも言われているのですけれど、こういった動機付け研究がずっと行われてきました。次の問題、モチベーションが高ければそれですぐに成功につながるのかという話ですね。今言った、統合的動機付けとか道具的動機付けだとか、八島さんの国際的興味だとかいう、こういう研究はどうやって行なっているのか、何をもって判断しているのか、というところのアンケートですね、学期の初めにアンケートをとらせて、「あなたはフランス人が好きですか」とか、「あなたはフランス人と友達になりたいですか」といった質問をたくさんするわけですね。それについて「はい」が多い人は、フランス人、フランス語学習に対して統合的動機付けが高くなっているとか、そういったデータに基づいています。で、例えば日本にはアメリカが大好きだという人はずいぶんいますよね。でもそれが必ずしも英語学習の成功に結びつくとは限らない。これはなぜなのか。日本中いろんなところで講演をしていて、よく出る質問があるんですが、日本人の学生っていうのは、今言ったような動

機付けは結構高い。つまり英語学習に対する動機付けは、みんな英語ができるようになりたいと思っているし、西洋的なものに対する憧れもあるし、英語ができれば就職でも有利になるだとか、道具的動機付けも統合的動機付けも結構高いにもかかわらず、何で英語が伸びないのか、という質問なのです。それはですね、簡単に言えば、いくらモチベーションが高くても、それが行動に結びつかなければ駄目だということです。だからフランス人がいくら好きだって、それがフランス語を学習するという行動に結びつかなければ伸びなくて当たり前なわけです。これに関連した研究で、いわゆるアンケートによる動機付けの高さと、教室における学習行動とどちらが積極的に学習にかかわっているか、のどちらがより成績を予測するか、という研究があるのですが、そしたらやっぱり、アンケートによる態度的な動機づけの強さよりも実際に教室で積極的活動をしているかどうかの方が、成績をきちっと予測した、というわけですね。結局モチベーションが成績を予測できるのは、モチベーションが次の学習行動を引き起こすから、習得に結びつくという、ある意味当たり前のことですが、これは実は大事なことで、なぜ日本人の学習者はモチベーションが高いのにできるようにならないかということ、やはり学習行動に結びついていないからなんですね。漠然と英語はできるようになりたいと思っている。どうやって学習行動に結びつけたらいいのか、この学習行動に結びつけるそのやり方がわからないんだと思うんですね。そこにいかに教師側が手助けをしていけるか、具体的な学習行動にいかしに結びつけるか、それをわれわれは考えていく必要があるとこういうことがそこから言えるわけです。モチベーションを学習行動に結びつけるということです。ですから、学習者のモチベーションを高めると同時に、その高まったモチベーションが、行動につながるようにしていかなければならない。

それからこの動機付け研究で最近注目されているのは、伝統的なアンケートによる動機付け研究は非常に静的な動機付け観に基づいているとの問題点です。つまり、学期の初めにアンケートとって、そしたらそれはあたかもこの



人の動機付けはズーッと変わらないのだと考えているような研究ですね、それは。でも実際問題としては、動機付けというのはどんどん変わって行く。一学期の間でも、最初やる気があった人が、一学期終わったらもうやる気がなくなっているということはいくらでもある。逆を言うと、途中であがってくるということもある。ですから、そういうスタティックな動機付け観ではなくて、もっとダイナミックな、動機付けはどんどん変わるという見方に基づいた研究も必要だ、ということです。実際そういった研究も増えてきています。

それに関連して最近言われているのは、タスクモチベーション。つまりさっき言った統合的とか道具的とか、そういうグローバルな動機付けだけじゃなくて、どういうタスクだったら動機付けは高まるのか。そういったようなことも、見ていかなければならないだろうと。それはさっき言ったように、学習行動、面白い学習行動というものは、やっぱり学習者はやろうとするわけですね。つまらないことばかりやらしていても、それはやる気につながらない。やはりその辺が、「漠然とした」モチベーションを、「具体的な」学習行動に結び付けて行くための重要なステップになるのではないかと思います。ですからタスクモチベーションという考え方を、われわれはもう少し意識しておく必要があると思います。

## 外国語学習のメカニズム

さて、ここまでしてきた話は、外国語学習における「個別性」の話です。つまり、どういう人が成功するのか、どういう環境にいったらどういう風になるのかとか、そういった話ですけれども、次の話は「普遍性」の話です。これが起こらなければ、外国語学習は起こらないであろう、という、そういう話ですね。その前置きとっては何ですけれども、ここで考えていきたいのは、効果的な外国語学習法とは何ぞや、ということですね。さっき外国語学習に成功する人の条件として5つあげましたけれども、その最後が、学習法が効果的



であるということでした。その効果的な学習法とは、次の3つに帰することが出来ると思います。

まず第一に「言語の本質に合った学習」。言語の本質から外れた学習をしていては、英語ができるようにはなりません。それから、「言語習得の本質に合った学習」。言語習得の本質から外れた学習をしていては、英語ができるようにはならない。それから3番目。「個人の志向にあった学習法」これはさつき適性と学習法のマッチングという話をしましたが、そういったようなことですね。さつきは適性の話をしましたが、個人の志向には他にもいろいろありますよね、学習スタイルとか。そして自分にあったやり方をする。例えば、グループワークが大嫌いな人にグループワークばかりやらせても駄目ですよ。ということで、個人の志向にあった学習法をしなければいけない、させなければならぬ、ということです。3番目はさつきも話をしたので、あとは1番と2番についてももう少し詳しく話をしたいと思います。

言語の本質とはまずですね、言語が出来るということはどういうことか。これが分からずに教えていても、学習者は言語ができるようにはならない。もしくははなりにくい。言語ができるということは、いわゆるコミュニケーションが出来る能力、communicative competence とよく言われているもの、つまり「コミュニケーション能力」です。そのコミュニケーション能力とは一体どういう要素で出来ているかという、(1) linguistic competence (2) discourse competence (3) sociolinguistic competence (4) strategic competence の4つです。

まず、いわゆる「文法能力」といわれているもの、linguistic competence は、音声・単語・文法能力ということですね。簡単に言うと、一文レベルであれば正しい文を、意味の通じる発音で言えると。そういうものと考えてください。今までの伝統的な教え方では、この第一番目ができれば英語ができるようになったというような幻想を抱いていたのですが、それだけできても実際には外国語は使えない。で、それだけじゃなくてですね、「談話能力 (discourse

competence)」が必要だということがわかってきた。一文以上をつなげる能力です。これは理解の場合、つまり聞いたり読んだりもそうですし、しゃべったり書いたりもそうですけれども、談話能力が必要であると。

それから、「社会言語学的能力 (sociolinguistic competence)」。

社会的に適切な言語を使う能力ですね。例えば、完璧な文法で文が言えても、発音も完璧であっても、それが非常に失礼な文であったりすると、それはまずいですよね。例えば先生に対してため口を聞くとか。やはり、社会的に適正な言語を使う能力もなければいけない。これは結構大事なわけですね。この、社会言語学的に適切な言語を使うっていうのは、実は外国人とコミュニケーションをとる時に非常に大切なわけです。外国人が実はむかついていてもですね、何も言ってくれないわけですよ。ものすごく失礼なことを言っている可能性はあるわけですね。でも、向こうは「失礼なやつだ」と思うだけで、直してはくれない。そこが非常に危険なところなので、これはちゃんと何らかの形で身につけさせなければならない。

それから最後は、「戦略的能力 (strategic competence)」。これは、コミュニケーション上の問題が起こったときに対処する力ということです。母語においてもこういう能力は必要なんですけれども、特に第二言語、外国語を使うときに必要な能力ですね。例えばみなさんが英語を話すという時に、次の単語が出てこないことがありますね。そういう時にどうするか。“uh…”とか“well…”と言って時間をかせぐとかです。それから自分の言いたい単語、例えば professor なら professor という単語が出てこなかったら teacher という似た単語で置き換えるとかですね、そういった strategy を身につけておかなければいけない。ということで、この4つの能力、他にもいろいろな分類方があるんですけれども、こういった能力がなければ言語が使えるとは言えない。これを、どの段階でどこまで教えるかは、われわれ個々の現場で考えていかなければいけない問題ですけれども、究極的にはこれらが全てあって、初めて言語が使えるという事実をわれわれは抑えておくべきですね。ですから、これが

「言語の本質」です。言語の本質から外れた学習をしていれば、外国語、英語は、できるようにはならないであろうということです。

### 単語と文法だけではだめ

それから、次に重要なポイントは、単語と文法だけでは駄目だ、ということです。これはどういうことかと言いますと、一般的には単語と文法さえできれば、一文レベルの正しい文が作れると思われているわけですね。ところがですね、言語には規則で割り切れる部分と、記憶に頼るべき部分があつて、規則がどこまで適応できるか分かっていないことがまだかなり多いんですね。ですから単語を覚えて、文法に当てはめただけでは不自然な表現になる。このことが理解されていないのです。例えば次の中で、どれが自然な表現でしょう。

- 1) I wish to be wedded to you.
- 2) I want marriage with you.
- 3) I want to marry you.
- 4) My becoming your husband is what I want.
- 5) I desire you to become married to me.

全部同じことを言っていますね。この中で普通に言うのは一つしかないんですね。I want to marry you. だけです。それ以外の文は、言ったら誰も結婚してくれない変な文ですね。で、ここでのポイントは何かということ、これらの文はどれも単語と文法の使い方はおかしくない。単語の使い方もおかしくないし、文法的にもおかしくないわけです。でも実際に言うのは3番目だけです。これは結局、単語と文法だけでは正しい文が作れるかどうかわからないという非常にいい例ですね。

あともう一つ、個人的な話ですけれども、ここで I want to marry you 以外の奇妙な文は、僕が大学1年の時にしゃべっていた英語そのものなんですね。つまり、高校までに一生懸命単語と文法を練習して、英作文とか練習して、

自分の知っている単語と文法で日本語を英語に訳していると、このような文がたくさん出てくる。でもどの文が自然で、どの文が不自然かを誰も教えてくれないわけです。だから、“My becoming your husband is what I want.”みたいなことを実際にしゃべっていたわけですね。じゃあ一体どうしてネイティブスピーカーとか、英語が本当にできる人というのは、3番以外は変な文だということがわかるようになるのか、という疑問が当然わいてきます。その話はまた後でします。

要するに、言語というものは非常にファジーなものなんですね。単語と文法、文法的ルールですべて割り切れるわけではない、ということのをわれわれは教師として意識しておく必要があるし、学習者にも意識させる必要があるわけです。つまり文法規則だけで全て割り切れないことをまず自覚する。規則と記憶の連続性の中に、中間的なものがたくさんあるわけです。

例えば“Hold your horses.”という、「抑えて抑えて。まあ、ちょっと我慢したら。興奮するなよ。」のような表現なんですけれども、このhold your horses という熟語は実は過去形では使わない。“He held his horses.”みたいな「彼は興奮を抑えた。」という意味では使えないんですね。それからspill the beans これは、「秘密を漏らす」というイディオムですけれども、これは過去形では使いますが、受け身の“The beans were spilt.”は言わない。まあ、言ったとしてもちょっと文学的な表現になる。普通に“The beans were spilt.”というと、「豆はばら撒かれた。」という字義通りの意味になる。これらはたった2つの例ですけれども、様々なイディオムにどの文法規則を適用できるか、というのはまだよく分かっていない。文法学者でも分かっていないことがたくさんあるわけですね。でも、ネイティブスピーカーはみんな“He held his horses.”が変な文だ、ということは分かるわけです。こういった知識は一体どこから来るのか。誰も教えてくれないけれどもネイティブスピーカーはみんな知っている、ということですね。それが、実は言語習得の本質なわけです。

## 言語習得の本質とは

ではどうしたらそういった言語能力が身に付くのか。ここから、言語習得の本質とは何かの話に入ります。まず、言語習得の本質、つまり言語能力がどのように身に付くかという問題に関して2つの大きな理論があると考えてください。まず一つは、「インプット仮説」です。インプットを理解することにより、言語習得がおこる。このインプットは主に聞くインプット（リスニング）ですけれども、リーディングももちろん役に立ちます。リスニングとリーディングですね。聞いたり読んだりすること。それから、もうひとつは自動化理論。自動化理論というのは、例えば車の運転を考えるといいと思います。車の運転の練習をする時には、最初は非常にゆっくりと、まずはキーを入れて、それから次にこうしてこうして、というふうに少しずつやっていますよね。毎日やっているうちに、どんどんスピードが上がって行って、最終的にはどういふものだったか忘れてしまうくらいに早く、人と話をしながらでもできるようになる。最初にあるプロセスに関するはっきりとした知識を身につけて、それを練習によって、自動的にできるようにしていくことによって、言語習得を行なうという考え方です。この二つの理論のうち、どちらが言語習得理論として正しいと思いますか。

まずは、インプット仮説について話をします。インプットにより、言語習得を行なう。これは、みなさん聞いたことがあるかもしれませんが、Krashen という研究者が提示した考え方です。極端な理論ですが、outputつまり話したり書いたりすることは言語習得には必要ではない、という考え方ですね。また、明示的学習、例えば学校の授業で文法の規則を教わること、そういう明示的な学習は、発話の正しさをチェックする能力のみに寄与する。つまりどういうことかという、例えば、三単現の -s、主語が三人称単数で、現在形の動詞には -s をつけるというルールがあります。これはわりと簡単なルールで、知識としては簡単に身に付く。しかし実際に、そういった「知識」

でできることというのは、何か自分が言おうとすることが文法的に正しいか正しくないかをチェックする、それに役に立つだけであって、実際の発話には役に立たない、そういうことを言ったんですね。

Krashen は、インプット仮説の証拠としていろんなことを言っているんですけども、まず一番分かりやすいのは、「沈黙期」という話ですね。これは主に母語習得の話なのですが、子供が言語を習得するときに、最初はずっと黙っているのが親が心配し始めるような子供も結構いるんですね。ところがある日突然話し出す。ある日突然話し出したら、それは完全な文で全く落ち度がない、こういう子が結構いるんですね。僕の知り合いの姪っ子が、ずっと黙っていて一番最初に言った言葉が「お母さん、夕陽がきれいだね。」って言ったそうです。このような子供は実はかなりいて、そういう子供がいるっていうことは、それは一語文、二語文、三語文と、少しずつしゃべって行って徐々に文を長くしていくというプロセス自体は、言語習得には必要ではない、必要条件ではない、という証拠になりますね。ですから聞いているだけで頭の中で言語習得はおこる、という話になりますね。今お話したのは母語習得の話になりますが、似たようなことは第二言語習得にもあって、特に思春期 (adolescence) 十歳や十数歳くらいの子供の言語習得でもよくあります。例えば、駐在員の子供で、最初のうちはずっと黙って聞いていて、ある日突然しゃべり出した、というのはよくあるケースです。ということで、第二言語習得でも、沈黙期がある。

もう一つ、Krashen がインプット仮説の証拠としてあげているのが、comprehension approach と言われている外国語教授法です。理解中心の教え方、聴解優先の教授法という訳をしているものもありますが、comprehension を重視した教え方が非常に高い効果を上げていると。例えば TPR (Total Physical Response 全身反応教授法) は先生が外国語で命令文を出すんです。「立ちなさい」「座りなさい」「Stand up.」「Sit down.」などの命令文を先生が言って、生徒がそれにあわせて動くという、この教え方は、教室活動のほとんどが聞く活動に費やされるにもかかわらず、聞く活動意外の

能力も伝統的な教え方に比べて劣らないという結果が出ているんですね。つまりこれはどういうことを示しているかということ、comprehension 活動、聞くという活動、聞いて理解するという活動が、他の能力にも転移するということを示しています。

それからイマージョン教育もインプット仮説の証拠としてあげられていますけれども、外国語を教えるのじゃなくて、外国語で教科を教えるのですね。つまり外国語で数学を教えたり、外国語で理科を教えたり社会を教えたり、そういう教え方です。日本では加藤学園とか、ぐんま国際とか、いろんなところで行なわれています。このイマージョン教育ではカナダにおけるフランス語のイマージョン教育が有名なんですけれども、小学校6年で卒業というか修了した時には、聞き取りにおいてネイティブスピーカーと差がないっていうんです。ネイティブスピーカーと差がないというのは、第二言語プログラムとしては驚異的なことですよね。というようなことで comprehension approach の効果というものを、Krashen はインプット仮説のよりどころとしています。ここまでで、インプットというものが習得の必要条件だということは分かりません。

しかし、必要十分条件は何なのか。ということはまだよく考えられていないところがある。本当にインプットだけで習得できるのか。インプットだけで習得できるという Krashen の仮説に対して反論、反証を少なくとも2つ挙げることができます。まず、テレビだけ見ていては習得できない。これは親が言葉を話さないで、テレビだけ見て育った子供たちがいるんですね。で、その子供がある時発見されて、その言語使用を調べてみたら、アメリカの話ですから英語ですけども、人が言っていることを聞いて分かるんだけど、しゃべらせてみたら文法がおかしかったということがあります。それから、受容バイリンガル。受容バイリンガルというのは、相手の言っていることを聞いて分かるが話せない。例えば、移民の子供で、親の言うことは聞いて分かるんだけど、話せない子がかなりいます。これはアメリカではごろごろしているんで



すけれども、日本にもたぶん沢山いると思います。大体子供というのは、親の言語よりも友達の言語のほうが大事なんですね。ですからアメリカに行ったら、ほとんど全ての子供は友達の言語ができるようになる。移民の親は子供をバイリンガルに育てようとして、例えば韓国語とか、中国語とか、日本語とか、自分の言語で子供に話しかけるんですね。でも子供はある段階で、親は英語を理解できるということに気がつくんですね。そうすると、親に対して、例えば親が韓国語で話しても、親に対して英語で話すようになるんです。その方が楽だから。そうすると、それをずっと繰り返して行くと、韓国語は聞いて分かるけれども、しゃべれないということになってしまうんですね。この受容バイリンガルのケースというのは、「インプットだけで習得できる」という理論の反証になるわけです。じゃあ、どういう条件が必要なのか。

「インプットだけで習得できる」と、「インプットだけでは習得できない」というこの2つの現象は、相反しますが、これをうまく解決するには、「インプット＋アウトプットの必要性」という考え方を持ち込めばうまく話のつじつまがあります。つまり、インプットだけでは習得できなかったケース両方に共通しているのは、どちらも「アウトプットの必要性」がないわけですね。聞いてわかればいいというか、しゃべる必要がないわけです。そうなると、頭の中で処理のレベルは落ちてきます。なぜかという、後でちょっと時間があつたらしゃべりますけれども、だいたい意味を理解するとか、内容を理解するというのは、単語だけ聞いていれば大体意味は分かっちゃうわけです。ですから、話す必要がないと、単語だけしか聞かなくなってしまうんじゃないか、というのが今のところの理論なんですから。ということで、インプットだけでは駄目で、アウトプットの必要性がなければ駄目だろうと。実際にアウトプットすることそのものは必要条件ではないということは、ずっと黙ってて突然しゃべりだすケースから分かりますよね。でもそういう子供たちは、最終的には自分もしゃべらなければいけないということは分かっている。ですからおそらく頭の中では何かしゃべっていると思われれます。実際に話さなくても、頭の中で無



意識的にアウトプットする。無意識的にせよ、意識的にせよ、これはどちらのケースもありますが、アウトプットする。これをリハーサルといいます。これは、僕自身がアメリカに初めて留学した時に実際に体験したんですけども、僕が最初に入ったのは寮だったんですね。大学の寮に入ったんです。周りに日本人はぜんぜんいなかったんですよ。実はいたんですけども最初はあることに気がつかなかった。人間というのは、その日にあったうれしかったこととか、楽しかったこととか、腹が立ったこととか、人に言いたいわけですよ。言う相手が誰だかわからなくても、その相手が日本人ではないから日本語で話しても無駄だということが分かっているので、頭の中で英語の文を組み立てていくわけですね。留学後しばらくすると、頭の中で英語でしゃべってる自分に気がついた。それをリハーサルと呼んでいるんですけども、実際にアウトプットの必要性があるから、そういうことがおこるわけですね。ですから、インプットに加えてアウトプットの必要性があれば、習得につながるということになります。じゃあ、なぜインプットで習得できるのか、という話ですけども、いわゆる「予測文法」が身につくということですね。われわれは言語をどんどん聞いて、言語の形式とその形式の表す意味を毎日、何千回、何万回とマッチングをさせていくわけです。

マッチングをさせているうちに、意味と形の関係が身についてくるわけです。それは、頭で考えていて身につくとかそういうことではなくて、自然に statistical information つまり統計的な情報として身についてくるわけです。人間というのは、次を予測する動物。人間だけではないですけども。人間は大体文を聞くと次に何が来るのか自動的に予測するようになるわけですね。

例えば、「昨日、ニューヨークから成田まで ANA で。」って言ったら、みなさんはその後すぐに「飛んだ」とかすぐに予測するわけです。無意識のうちに。自然に何か引き出しているわけですね、頭の中で。次に何が来るか母語話者は瞬時に、そして無意識的に予測している。この知識は誰も教えてくれませ

ん。この知識は文を大量に処理することによってのみ身に付くことで、誰も教えてくれないんですね。これがインプット理論の説明です。

## 自動化理論

さて、もう一つの自動化理論ですけれども、これは、一体どういったものかという、まず最初に「明示的知識」を身につけるといことですね。例えば文法を教わる。三単現に -s をつけるというルールを教わるんですね。最初は“He go to the store.” って言っているんだけど、「いけない、-s をつけなきゃ。」ということで、“He goes to the store.” と、何度も言っているうちに自然に使えるようになる、みたいな感覚ですね。これは理論によっては、宣言的知識が手続き的知識にかわるというように呼ばれている場合もあるんですが、このような言語習得理論は 1980 年代にカーネギーメロン大学の有名な心理学者によって提示されたのですけれども、これには 2 つの大きな問題があるんですね。1 つは、複雑な知識を全て明示的知識として習得することは無理ということです。つまり、皆さん日本語はペラペラにしゃべれると思うのですが、日本語のルールで 1 つでも説明できるものはありますか。例えば「は」と「が」の違いとかですね。それを外国人に説明しろと言われて、まあ、日本語教師だったら説明できますけれども、普通は説明できない。それはですね、母語話者が自分の言語について意識的にルールをまず覚えるということは必要ないことだからです。子供がそういうことを考えているとも思えませんしね。これはですね、例えば「は」と「が」の違いなどは、言語学者が何十年も研究してもまだよく分からないのですね、正確なところは。世界中の言語には、何でもこういうふうになるのか分かっていない、ということはたくさんあるわけです。それを第二言語学習者がまずそのルールを全部覚えて、それを自動化して習得するというのは、実際問題として論理的に不可能なわけです。ですから、まずそういった意味で、自動化理論というのは習得理論として破綻しているわ

けですね。それからもう一つはですね、自動化そのものに限界がある。例えば、三単現のルールっていうのは頭ではわかっています。みんな。ところが実際にしゃべろうとしたら、それは使えませんよね。これは自動化そのものに限界がある、知識で分かっているでもそれを自動的に使えるようにはならないということがある。この2つのことによって自動化理論は完全な言語習得の理論としては不十分だと言えるわけです。

まとめると、インプット理論はL1(母語)、L2(第2言語)共に言語習得を説明する理論としては正しいだろう。それに対して、自動化理論は母語習得においては、全く関係ないと言ってもいいであろう。そしてL2の習得に関しては、ある程度有効性はあるかもしれない、ということですね。ですから、外国語学習においては、両者を最大限に利用すべきであろうということになるんですが、考えなければならないことは、われわれが両者を最大限に利用しているかどうか、ということです。実際問題として、あまり有効利用していないであろうと思われるのが、インプット理論です。実際に日本の英語教育は、ほとんどが自動化理論にもとづいていて、インプットが圧倒的に不足しているわけです。しかも自動化の部分はあまりやらないので使える英語が身に付かない。

以上を要約すると、こういうことになります。

- (1) 言語習得は、かなりの部分がメッセージを理解することによっておこる。  
(これが、先ほどふれたインプット理論です)
- (2) 意識的な学習は、
  - a. 発話の正しさをチェックするのに有効である。(これは先ほどの Krashen が言ったことです)
  - b. 自動化により実際に使える能力にも貢献する。(これは自動化理論)
  - c. 聞いているだけでは気づかないことを気づかせ(1)の自然な習得を促進する。

この c は、noticing(気づき)と言われていて、最近かなり注目されています。結局、外国語を聞いたり読んだりしているだけでは気がつかないよう

なルールとか、情報とかがあるんです。例えば、冠詞の a と an の違いですけども、これは、聞いているだけでは、どういう時に a をつけて、どういう時に an を使うのかというのは気がつかないんですね。それをルールとして教えてあげれば、次からは a と an を聞いた時に、それが聞きとれるであろう、ということになる。さらにそれが一番自然な英語習得のプロセス、つまり comprehensible input、インプットを理解するという言語習得のプロセスを促進するというふうに考えられるので、明示的、意識的学習の重要な効用となるわけです。

## 日本の英語教育の問題点

ということで時間がきてこの辺で終わりにしなければならないのですが、ここところが実は一番大事なところで、「言語習得のかなりの部分のメッセージが、このメッセージを理解することによっておこる」。この部分を見逃した英語教育が行なわれているのです。自動化理論にもとづいた教え方が蔓延しているわけですね。ですから、できるようにならなくて当たり前と、当たり前なんです。効果的な外国語学習は、大量のインプットがまず必要である。と同時に必要なのが、少量のアウトプット。なぜなら、アウトプットの必要性を作るためには、少しでもアウトプットさせれば、それだけで十分だからです。全くアウトプットさせなかつたら、アウトプットの必要性さえありませんから、言語習得はおこりにくい。その辺を考えて行く必要があるわけです。

## 現場への応用

今日は、中高の先生方も多いということで、ちょっと時間がオーバーしてしましますが、あともう 2 点だけ話させてください。第二言語習得研究の結果として一番重要な発見というものを 1 つ挙げるといったら、「習得順序研究」

だと思います。習得順序研究というのが70年代に多数行なわれて、どういう順序で教えても、習得の順序はかわらないという文法項目が多数あることがわかった。これは、いわゆるコペルニクス的な発見で、例えばわれわれ教師は、三単現の -s を教えたなら、三単現の -s がすぐにできるようになって当たり前だと思っているわけです。ところが実際問題として、三単現の -s というのは非常に難しい、ということが研究の結果分かった。どういう教え方をしても、三単現の -s は難しいわけです。ここで分かることは、教えたからといって、すぐにできるようになるわけではない、ということです。われわれは、教えたことはすぐにできるようになると思っている。そう思っているから、教えたことがすぐにできるようにならなかつたら、悪いのは生徒か先生なんですよ。でも、そういうことではない。そのことは、われわれは教師としても、それから学習者にも伝えていかなければならない。何度も何度もやっているうちに、できるようになるんだよ、ということですね。

それで、今の習得理論にもとづいて実際にどういうふうに教えればよいかという話ですけれども、結論として、大量のインプットと少量のアウトプットを組み合わせるということですね。インプットだけでも駄目で、アウトプットを少し。インプットを増やして、アウトプットをそんなには必要ないけれども少しだけはやる、ということですね。

それから、同じ教材、もしくは関連教材を使って、インプットとアウトプットを行なう。これは、同じものを何度もやるとですね、その度ごとに理解の度合いが高まって行って、理解可能なインプット (comprehensible input) の量が増えるということですね。それから、インプットは理解可能なものでなければ駄目です。全く分からないものであれば、右から左に抜けていってしまいますので、インプットは理解可能なものを使わなければならないわけです。で、インプットを理解可能にするにはどうしたらいいか。いろいろ方法がありますが、まず分野を絞ること。これは、個人学習において、非常に有効です。例えば、テニス好きな人はテニスに関する記事をたくさん読んだり聞いたりする

といったようなことです。そうすると、その分野に関する知識、背景知識と単語の知識が身に付くので、どんどんその分野について分かるようになるんですね。そうすると、その分野に関してかなりネイティブに近いコアな外国語能力能力が身に付くということです。あとは、他の分野に関して、背景知識とか単語を増やしていけば、他の分野にも応用が利くわけです。それから、同じ教材を使って、リスニングとリーディングをする。これも有効です。一回目、リスニングで分からなくても、次にリーディングをやって、今度は理解度が深まる。それからさらにリスニングをやってもいいですね。

それから、あとはアウトプットっていうのは口に出して何か言えればいいと思っている人がいるんですが、それはある意味では効果があるんですけども、第二言語習得でいうアウトプットというのは、実際に頭の中でメッセージを作り上げて、自分の言いたいことをしゃべるということ、それがアウトプットです。ですから、アウトプットと言った時に、単なる鸚鵡返しではない、自分の頭の中でメッセージを作って、それを自分で作って言ったり書いたりする。それがアウトプットなので、それは誤解しないようにしていただきたいと思います。

最後に、偏差値が10上がったという実践を少し紹介します。これは一番最初に話した、インプット理論の提唱者である Krashen が提唱した Natural Approach というのを応用したんですね。Natural Approach っていうのは何かというと、「教室は comprehensible input を与える場として考え、文法学習は家庭学習にまわす」という考え方です。実際何をやったかということ、高校で文法の授業を廃止したんです。そして、それを宿題にしました。で、テストに出しますと。何パーセント出ます。というふうにして、家でやらせる。それで、空いた時間を、サイドリーダーなどによる多読、多聴にまわしたわけですね。これでインプットの量を増やす。大体普通の教科書の10倍くらいのインプットをこの学生たちは処理していると思うんですね。それで、あとは comprehensible input の量を増やすために、L-R reading というのをたく

さんやったんですけども。まず段落レベルでリスニングをして、英語の T-F questions をやるんですね。先生が T-F questions を読んで、生徒は true か false をノートに書く。次に、同じ段落のリーディング（黙読）をやらせる。そしてもう一度同じ T-F questions をやらせるんです。このようにして、相当な量の comprehensive input を彼らはもらうことになるわけですね。インプットモデルの効果というものがある程度は示しているモデルになるのではないかと思いますので、紹介させていただきました。もう少し詳しいことは来年大修館から出版される予定の本（仮題：英語教師のための第二言語習得論入門）に書きますので、それをご覧ください。

(2010年7月17日、九州国際大学での講演)